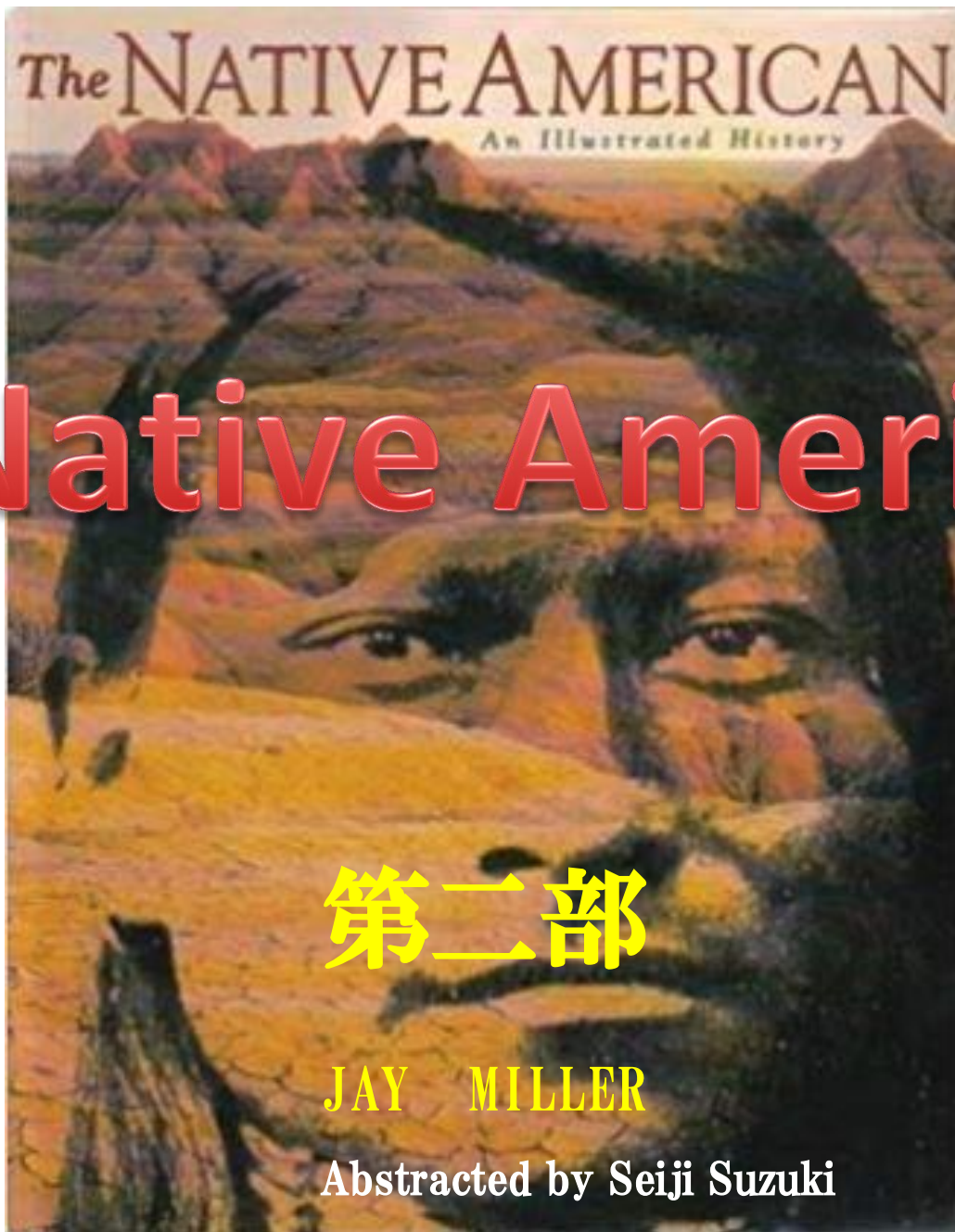




The Native American

第二部

JAY MILLER

Abstracted by Seiji Suzuki

BLENDING WORLDS

混じり合う世界

ずっと昔、私の父が、彼の父が彼に話したことを私にしてくれました。

それは、昔、Drinks Waterと呼ばれたラコタ族の聖人がいて、彼が、何であるべきかという夢を見た・・という話です。彼は、4本足のものは、大地に戻り、そして、奇妙な人種がラコタ族の周りの全ての織物を織るだろうという夢を見た。彼は、“お前たちは、四角い、灰色をした家に住むだろう、やせた土地の……”

時には、夢の方が、起きている時よりも賢い時がある。

BLACK ELK, OGALALA SIOUX, ca. 1932

広大な
大陸の豊
かさ

異なった社会と、
宗教、しかし、
全ては、自然の
世界の生活を与
える資源に基盤
が置かれていた。

新しい世
界でのに
らみ合い

ヨーロッパ人
が、先例の無い
変化、恐ろしい
変化、大混乱、
そして、死とい
う変化を持ち込
んできた。

南西部とカ
リフォルニア
海岸地帯

スペイン人は、
100年も後に
なって、一実際
には、200年も
後であるが、な
おもプエブロを
征服しようとし
ていた。

北東地域

ヨーロッパの
国々にとっては、
大西洋の海岸は
とにかくとても
魅力的だったの
だ。

イギリス
と大西洋
沿岸地域

イギリスは中央
の大西洋岸地域
に彼らの最初の
植民地への入植
者達を送り込ん
だ。

大平原と
北西地域

そこでは極めて
大きな変化が、
1400年代の後半
から、1500年代
を通して起きて
いた。

広大な大陸の豊かさ

- 北アメリカの原住民の人達の間で1000年にわたり発展して行った豊富な多様性は、1500年代の初頭では、まだ、全盛期だった。
- こうした人びとのほとんどが、大地からの食料の恵みにとても注意深かったが、ある者たちは、ほかの人達が彼らの住んでいる領域にたっぷりとある野生の食料資源に原則的に頼っている一方で、ほとんど彼ら自身の非常にうまい農業技術により生活していた。

乾燥した南西部にある高いテーブル状の大きな岩山に住んでいたアナサジ族、プエブロ族の先祖であるが、彼らは、集約的に農業をしていたその畑の上の、きわめて狭い場所に、とてもたくさんの人が住むことができる、崖の家を開拓していた。

カルフォルニアの原住民や、北太平洋の海岸の人達のように、海からの恵みを受け、穏やかな天候のため、野生の食料資源からは解放された人々は、精巧な階層社会も発展させていた。

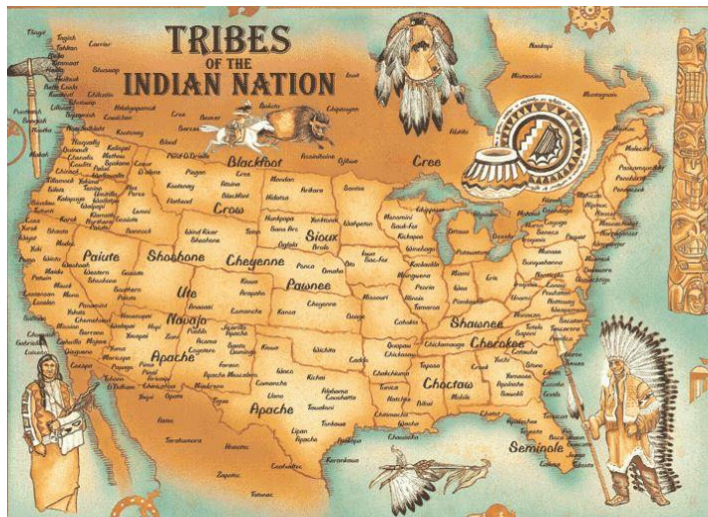
南部の、そして、ミシシッピー川から大西洋の海岸にかけての肥沃な川の流域に沿った地域では、農業をするたくさんの共同体があった。彼らは、トウモロコシ、大豆、かぼちゃ、ひまわり、そして、そのほかの北アメリカで長い間栽培化されて来た植物の多くのものを育てており、豊かな森林の中で獲物を仕留め、湖、河川、そして、大洋からの魚と言うように非常にうまく調整された食料の供給で、これを補完していた。

西や北に行くと、川や、近くのそのほかの水の供給源に沿って、この地域には、毎年決まったように古い時代のキャンプサイトを巡り、一川に泳いでいる鮭を取ったり、海や森の中の哺乳動物の猟をしたり、そして、季節ごとの植物、新芽、種子、木の実、果物、そして、根株などの収穫をして、豊かな自然にもっと頼っている人たちがいた。

女の血縁関係の力

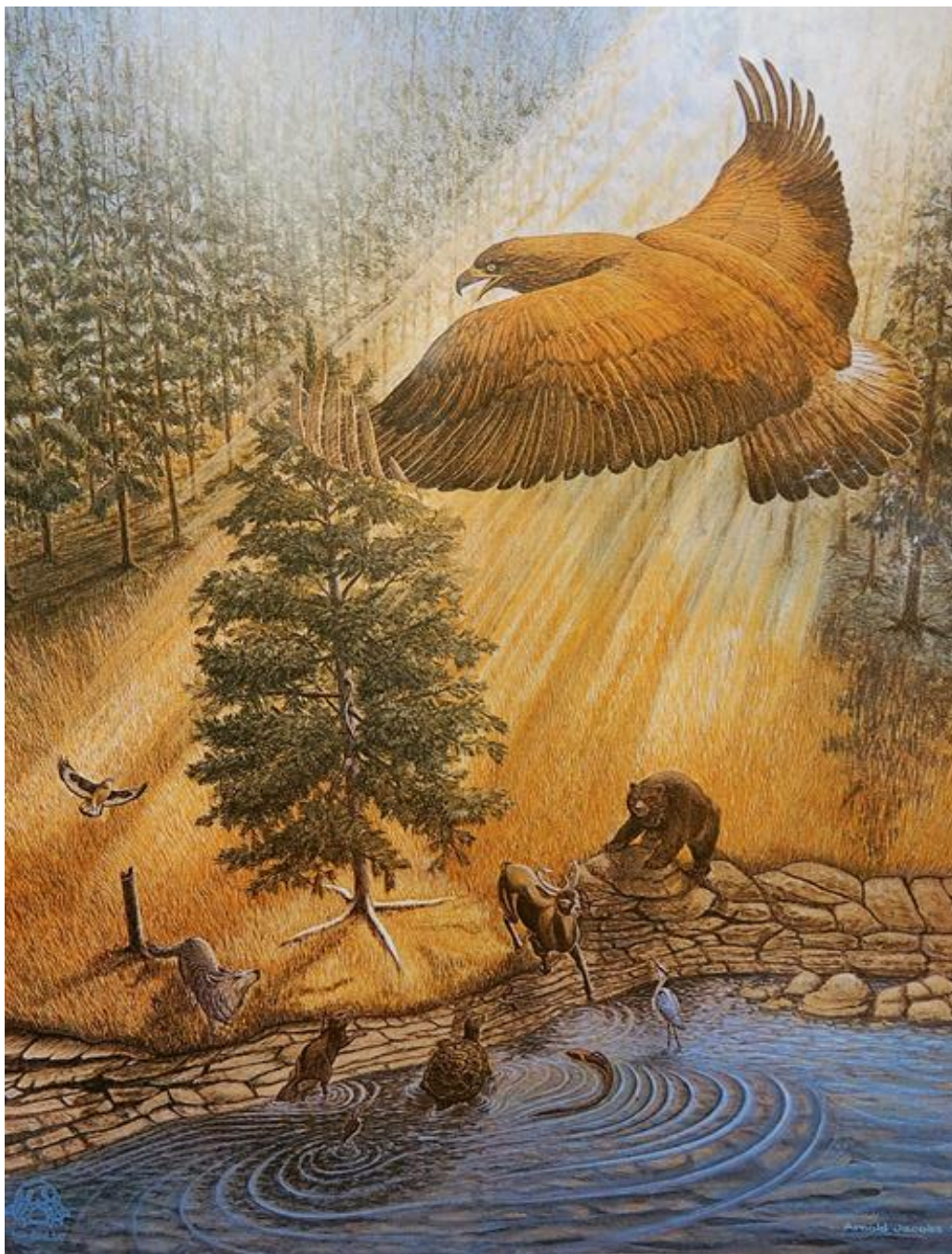
母系制は、女たちから、元来、超自然的であった通常の祖先へと繋がって行く神秘主義的な結合により氏族のなかにさらに結び繋がれていた。

女たちは、基本的な役割は、妻であり、母であることから、和平調停者であり、仲裁者であった。彼女たちは、まさしく、川であり、そして、道でもあったように、結束者であり、接合者だったのだ。



シャイアン族の社会での、女になったその重要性を祝う
“coming-of -age” の儀式

500以上の部族と言われる

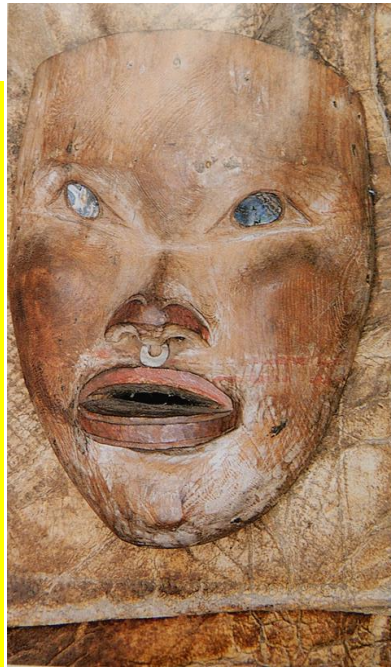


創設者の生き物を描いた象徴的な絵

氏族は、それは、燧石（岩は神聖な人達だったので、）、トウモロコシ、鹿、オーク、星、あるいは、戦闘士の体やもの、これらは、人間性、精神、そして、通常的な統一体のなかに一緒に存在するもの、こうしたもののその根源をもとに名前がついていたのだろう。

精神の世界

祈祷師たち、自然物理学者であり、典礼研究家でもあったが、彼らは、よくその地域の川の流れや道路の旅人であった。彼らは、あたらしい技術や、学ぶために幅広く旅していたし、また、既にあるものを改良するなどしていた；そして、非常に広い範囲にわたり、たくさんの集団社会を、彼らの呪術によって、強く結びつけるようにしていた。しかも、祈祷師たちは、精神と宇宙の力を直接、結合するようなこともしていた。



真珠母をはめ込んだ
Tlingit族の魔術師の仮
面



Slow Bull Oglala Sioux族の呪術師

言語と文化的さまざまな変化



アタパスカン語族

アルゴンキン語族

ナデネ語族

ナバホ語

アパッチ後



物語の語り部

口頭での伝統は、楽しみと涵養のために話され、繰り返されて伝えられてきた叙事詩の中の部族の歴史を保持して来た男や女達に榮譽を与えてきた深い畏敬の念に対して良い物語を話す能力に大騒ぎする鑑賞からわざわざ進んでいくのだ。

ほとんどのインディアンの文化の中で、高く尊敬された技能であった。

私たちは、豊かであるようにと祈る



こうした響きと光の交差するところは、精神により支配された点であり、神聖な場所で、そして、重要性を先導するものであった。そのそれぞれの交差する節目が、多かれ少なかれ、生活の中のより明確な目標を持った様式、あるいは、組織体のための中核として働いていた。とはいえ、最近の世紀では、こうした中核となるものの最大の辛抱することが、全ての人々の心を、それぞれの家族の炉床を、そして、天空の太陽を包んだ。こうしたものは、関心を集めさせることや共同体の感覚により結びついているものだ。全ての場合において、こうした中核となる場所の様式は、宇宙のすべての局面を生み出し、そして、共同体の活力に対して意味合いを与えるための枠組みであった。

新しい世界でのにらみ合い

ヨーロッパ人のアメリカに到着したことが、ある種の彼らの理解をはるかに超えた、あるいは、想像を超えた一洗礼の無い変化、恐ろしい変化、大混乱、そして、死という変化を持ち込んできた。



メキシコ、そして、ペルーを略奪することに成功すると、スペイン人の征服者たちは、彼らがLa Florida－花の土地－と呼んでいた地域の海岸を探検するための調査団を送ろうと、北方に目を向けた。



フロリダの海岸線が、彼らが予測していたような軽微な財宝の類をもたさないと、スペインの前衛部隊は南部地方に向きを転じた。



彼らはミシシッピーの人達－彼らの子孫たちが、クリーク族、チェロキー族、カド族、チョクトー族、そして、チクカソー族として知られるようになる－により強力に統治された、おびただしい、そして、繁栄した農場や、住宅の中心地を破壊し、そして、略奪を繰り返して行った。



酋長であるAthoreに指導されて、Timucua族のインディアン達が、比較的初期の段階のフランスの入植者達人達から選ばれた人の列の足元に収穫物と兵器を誇示している。



1541年のDe Sotoによるミシシッピーの発見 William H. Powell , 1853

裸体のインディアンの女を目立つようにしたロマン化したイメージの図。De Sotoのミシシッピー川沿いの旅は、壁塗りされた家の建つ、大きな集落を持った、神殿の丘の地域であった。農業の集団によりきちんと綺麗に仕上げられた貴族社会の洗練され、そして、成層化された文化に帰するものだった。

De Sotoの略奪行為のルート



De Sotoが実際に辿った道順は必ずしも明確ではないが、その全体の行程はかなりはっきりしている； 4年間に渡り、彼の軍隊は、今日の合衆国の南東部のかなりの領域を旅した。

De Soto

Hernando de Soto、ペルーの征服者であった時代では、猛突する若い隊長であった。そして、その後、彼は、そこで得た戦利品の彼の持ち分を、もっとたくさんの財宝が得られるかも知れないフロリダのチャンスに賭けた。

1539年5月に、de Sotoの、9隻、とその船員、大量の馬、ミュール、豚、そして、闘犬と言った十分な装備をした探検隊は、500名以上ものヨーロッパ人（この中には、女性連れのペア、そして、ごくわずかの宣教師が含まれていた）とともに、フロリダの西海岸、今でいうタンパ湾の近くに上陸した。

de Sotoには、幸運に恵まれた。探検隊の若い生き残り Juan Ortizに出遭う

地方の酋長たちのなかにあるライバル意識が、de Sotoには、二番目の幸運の兆しをもたらした。

四年間にわたるスペイン人の狂暴と探検

略奪

暴力

強制労働

反乱

略奪と強制労働

Tainoインディアンが、Narratio Regionemに最初に出てきた、スペイン人にとって貴重なものを運びだしているところを表している、この彫刻は、Santo Domingo教会の僧侶のBartoleme de la Casaによる、A Brief Telling of the Destruction of the Indiansである。1552。

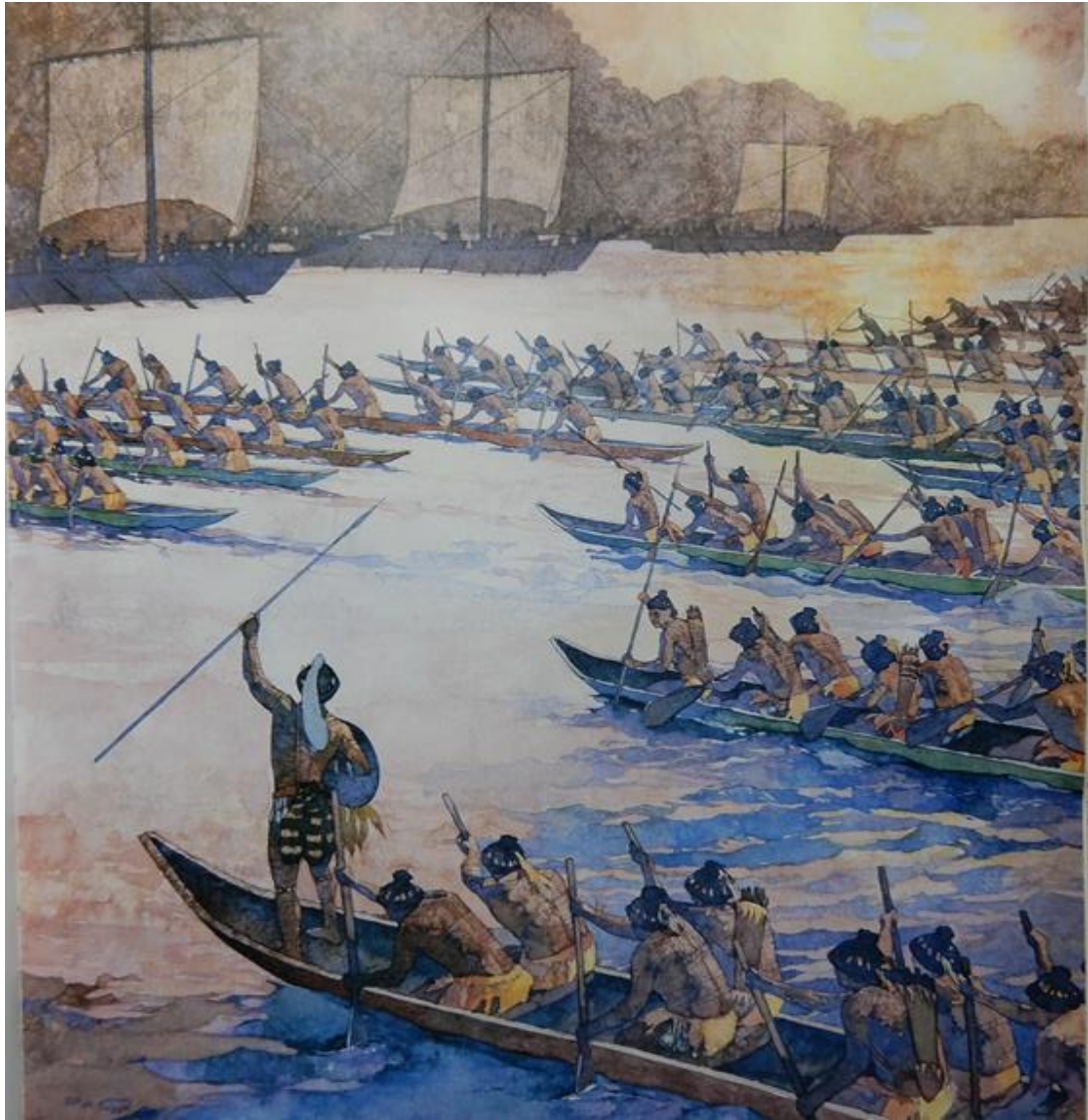


この Theodore De Bry は 1590年に彫刻されたもので、スペインの侵略者たちの荷物と物資運びを強制されているインディアンを表している。de Sotoの探検隊は、奴隷を扱うための道具を持って行った。





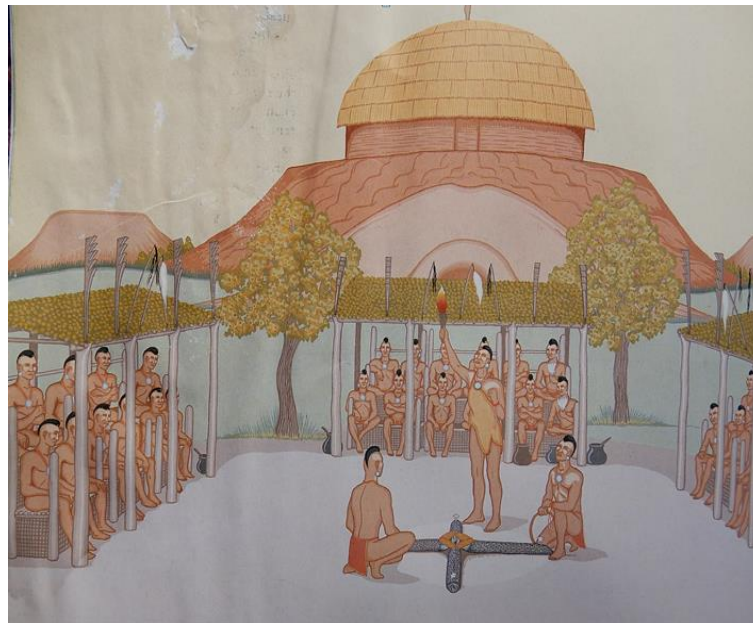
このインディアンがスペイン人と戦っている様子



スペイン艦隊に対するインディアン達の攻撃

遭遇の余波のなかで

スペインは気が付くと、彼らが現実にしたこと以上より大きな破壊を残して行った。



Green Corn儀式

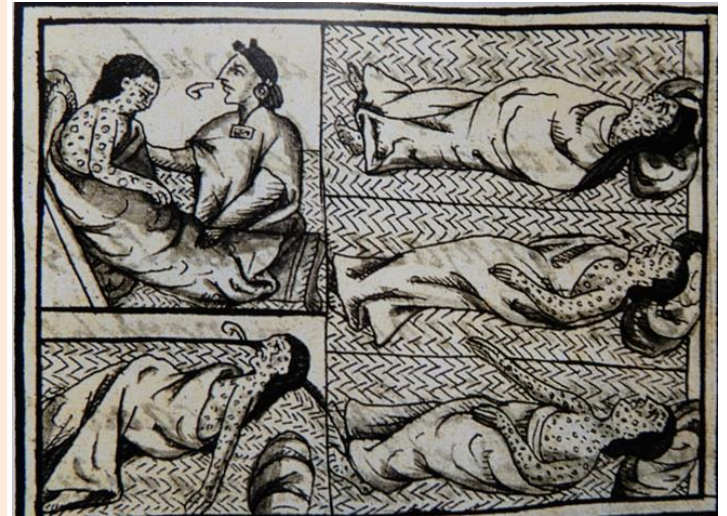
新しい火が四角い広場の中央の位置で灯され、四方にさしている丸太により火が燃やされている。それぞれの氏族の男達が、大地の北、東、南、ならびに、西にある特別の木陰に座っていた。

疫病

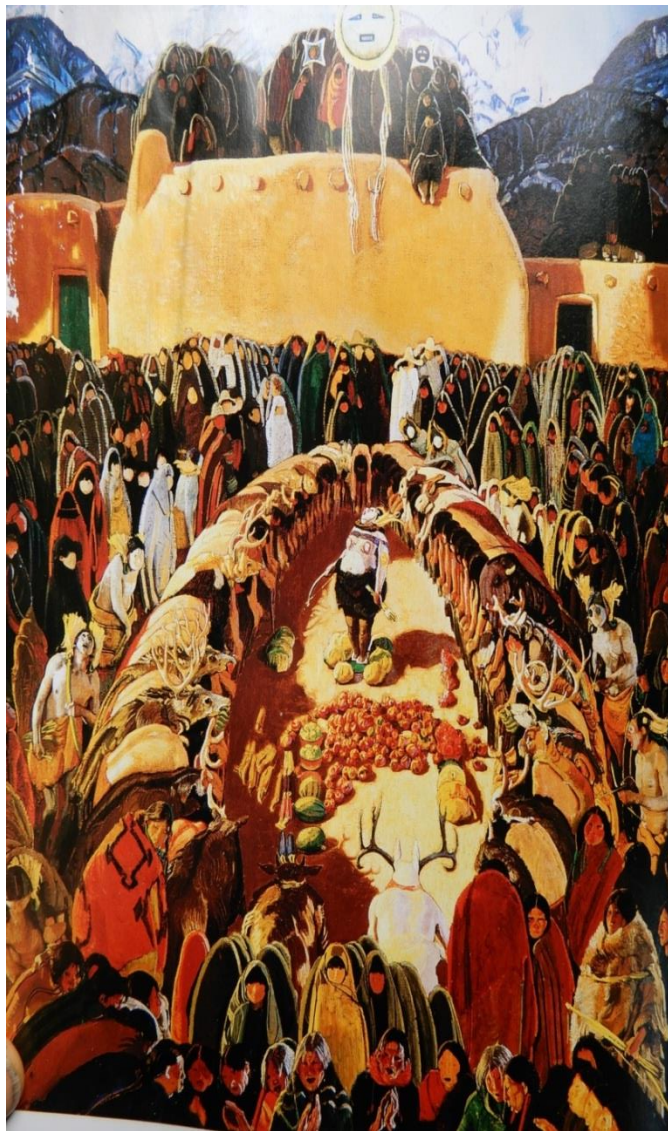
ヨーロッパ人の富、奴隷、そして、土地への探究の最期の結果は、原住民の社会的な秩序の造り直しであった。しかし、それはこの膨大な変化を生み出したヨーロッパ人、彼ら自身の直接の行動ではなかった。むしろ、それは、毒気に満ちた疫病の彼らの不注意に基づく導入であった。ヨーロッパ人が、いわゆる新しい世界と呼んだ地域に持ち込んだ病原菌が、生まれつきそこに住んでいる住民のところに、無条件に、そして、完璧に蹂躪を与えるようにやって来たのだ。原住民はそれに対して何の免疫も持っていないアメリカのなかでは知られていない疫病が、ものすごい勢いで、胸を引き裂くような損傷を残して、全ての集団を攻撃した。

寄生虫、あるいは、ときには栄養失調、そして、極わずかの病原菌以外は、アメリカの原住民はすこぶる健康であった。人々は、開放的で、密集せずに暮らし、草の薬剤や漢方医療についての素晴らしい知識を持っていたし、また、天草の風呂での身の清めを実行していた。こうしたことで、通常の病気に対する対策は十分であった。しかしながらこうした生活の方法は、ヨーロッパの街や港の不浄さのなかで産まれ、そして、増殖した病原菌に対しては、何の手立てにもならなかった。

天然痘、囊虫、そして、そのほかのヨーロッパ人の持つ通常の病気が、その集団のほとんどの人が実際のヨーロッパ人と会う前に、彼らの社会を蹂躪していった。その地域の全体が、人口を削減されてしまった。ただごくわずかの、資源の豊かな、そして、自由度に富む社会だけがこうしたまか不思議な攻撃に対する生き残るのに十分なだけの生まれつきの運命を持っていた。しかしながら、ただ一つの流行病は、だんだん弱まっていく人口に追い打ちを掛ける猛攻撃をした、良く知られている生き残った病原菌によるものだった。人種の間の性的な接触が、さらに多くの原住民の人達を殺した梅毒の様な病気の新しい変形したものを生み出して行った。



南西部とカリフォルニア海岸地



De Sotoの生き残りの者たちが、テキサスに入り、彷徨っている間、原住民の社会で見られたような自分達と同様の男たちがいる西部の地域に多くの人々が団結していると言うニュースを持った旅行者たちと近づきになった。疑いもなく、原住民たちは如才なく実際に起こっている略奪については何も言わなかった。

こうした報告は、Francisco de Coronadoに率いられたスペイン人とメキシコインディアンとが一緒になったおおきな軍隊の侵略にもとづくものであった。1541年と1542年に、この軍隊は、東と西への領域に沿って、後にニューメキシコとなった領域に侵入し、探検をした。

月、朝方の星、夕方の星

豊作と獲物の動物たちへの感謝の祈りを表す儀式の内容を表している。

初期のプエブロ

プエブロの人達は、千年以上の渡って非常豊かな文化的多様性を発達させてきた

敵愾心を持った部族ーアパッチや、ナバホ、ウテ、そして、コマンチ族などを元祖とする人達

住居



Zuni Pueblo



Pueblo の眺望



最期の夕食

全てのスペイン人が、大変な富が、略奪されることを待っているはずだと信じたように、この噂を真に受けた Coronado は、今日のアリゾナとニューメキシコの州境にある数階建の家々がある豊かな街という嘘のような報告を信用した。Cibola と呼ばれた場所は、実際に実在した—その街自身のはやりの型にちなんでいる名前であるが。それは、Zuni プエブロの街だった。

Coronado と数百人もの彼の部下が、彼らの原住民メキシコ人の召使を伴って、北の Zuni に進軍した。

プエブロの地へのスペイン人入植者達

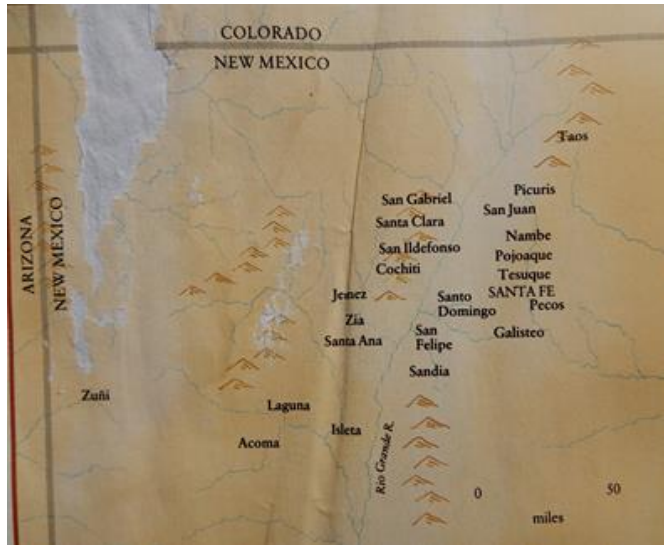
スペイン人は富を追いつけ、彼らの金に対する強欲に目がくらみ、現実を見る事ができず、再びニューメキシコに戻って来た。

南に戻った時に、使節団はその地に残った

Tewaの周辺のOnateの植民地

1598年

今日のニューメキシコ全体、ここが自分自身の費用で恒久的な植民地を見つけようというJuan de Onateに譲渡された。



Tewaの領域のはずれには、神聖な塚や丘があった；内側に入ってくると、そこはTewaの人達が建設した神殿であり；そして、やがて町のなかの広場やキーヴァに入ってきたが、ここは、重要なダンスや儀式が執り行われる場所であった。

Rio Grande Pueblo

Coronado が 1540年にRio Grande 溪谷に到達して時、豊かな、そして、顕著な文化の伝統を持った100以上ものプエブロがそこにあった。



Koshare と一緒のCochiti Green Corn Dance

600年以上も前のことであるが、人々を土地に結びつける様な大宇宙の様式、こうしたものは、プエブロの古代の祖先たちにたどり着くものであり、数千年にわたり既に行われていたものであるが、こうしたものが盛んに行われていた。



Kachinas は、踊りと歌で祝うたくさんの自然の局面を表現している神聖な精神である。Mosairu Buffalo Kachinaが、生活の源となるたくさんのものを祈りながら踊りを踊っている。



Ah o la, Powamuの儀式では、とても重要な役割を果たしているが、これは、太陽に対し、健康で、幸福で、長生きし、そして、豊作であることを懇願している。



Paiakyamuあるいは Hano Chukuwaiupkia, Hano Clown or Koshare, これは、Hopiの間で最初のメサに住んでいるTewaのKossaの精霊から来ている。どの道化役者とも同じように、彼は、非常に比例で、騒がしい。



Spwi-ing Kachina, あるいは、Dear Kachina これは、非常に力強く、鹿を懇願しているだけでなく、雨をも管理している。



Takus Mana, Yellow corn Maiden は、ひょうたんの実の“おろし”で、踊りをする時の付属品の一部を示している。



Palakwai, Red-tailed Hawk Kachia, これは、最初の年の主たるkatinaの一つ



A-ha Kachina Manz “mana”の文字の意味は、“おんな”。ここでは、kachinaは、実際の演技者は男性であるが、女性であることを象徴化している。

さまざまな時代に、プエブロの敵愾心の炎がくすぶり、大きくなっていくと、プエブロの人達は、あからさまに抵抗した: 1632年のZuni、1639-1640年のTaos、1644年と、1647年には再びのJemez、そして、1650年のTewaの集落と言った具合であった。

プエブロの反乱

さまざまな時代に、プエブロの敵愾心の炎がくすぶり、大きくなっていくと、プエブロの人達は、あからさまに抵抗した： 1632年のZuni、1639-1640年のTaos、1644年と、1647には再びのJemez、そして、1650年のTewaの集落と言った具合であった。



プエブロの反乱

1680年に数十年に渡るスペインの探検と宗教的な迫害により、疲れ果たし、そして、苦しめられ、プエブロのインディアン達は、抵抗のために一つにまとまった。その多くは、プエブロの土地からスペインの入植者たちを追い出し、その後、12年もの間、それに成功したプエブロの反乱を組織し、それを管理した原住民の僧侶たちだった。

プエブロの人達は、1692年までだけ、ニューメキシコからスペイン人を追い出すことに成功した

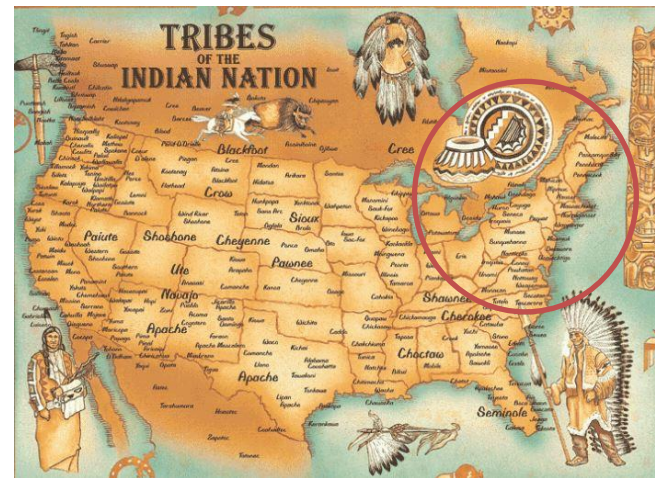
カリフォルニアの海岸線

17世紀の間、Sebastian Vizcainoのようなスペインの船団は太平洋の海岸を、潮流を図示しながら、南港の地図を作って北上して行った。別の探検隊は、鉱物と改宗を伺いながらこれに続いた。de SotoやCoronadoの探検隊のように、こうしたスペインの冒険家は、スペインの太守によって認められていたが、しかし、個人的な費用でこれを実施していた。こうしたことは、一まさしくde SotoやCoronadoのように、もう一度—彼らは彼らの投資を回収し、そして、富とするために、彼らの思い通りになんでもすることを意味していた。

こうした使節団の運んできた伝染病によりかろうじて生き残った人々のほとんどが、今日のSanta Barbaraの近隣に住んでいたチュマッシュ族だった。



北東地域



かつてスペインは、南部の内陸と同じように、アメリカの南部の海岸地帯に確たる領有地を確立したが、発展した植民地を探し求めていたその他のヨーロッパの国々は、どこであろうとも可能性のあるところの探索を強いられた。大西洋の海岸はとにかくとても魅力的だったのだ。

北東地域の農民は、**ヒューロン族**で、今日でいうGeorgian 湾の近くにある街に住んでいた。

北東地域の海岸の川の流域は、さまざまな形で多様化された**アルゴンキアン語**を話す人たちの集団で占められていたが、一方、内陸の川の流れに沿ったところにはイロクォイ族が住んでいた。アルゴンキアン族と**イロクォイ族**の人達は、少なくとも、千年はこうした土地でお互いに接触し続けていた。

彼らは、Subarctic(亞北極圏)を放浪している、定期的に交易のために、毛皮を持って南に下がって来る移動民族の部族と接触を続けてきた。



まやかしの顔の物乞い達

Edson Thomas (Onondaga), 1963

幻想の顔として知られた、亀のガラガラを持った男たちにより被られた仮面は、まやかしの顔の社会の組員の夢の中に、出てくる幻想を具体的に表現している。真ん中の男は、“スプーンの口”にちなんだ仮面をつけている。

北東地域の共同長屋

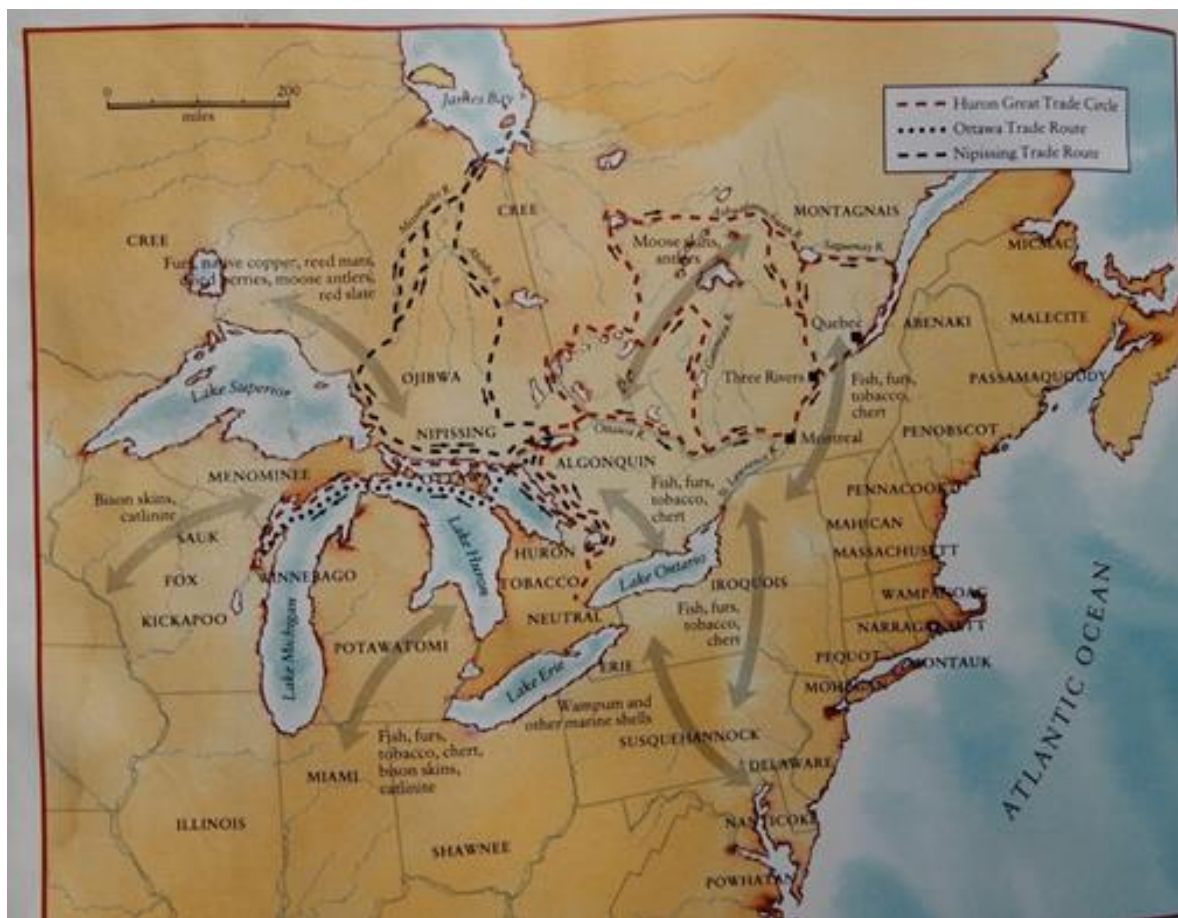
by Greg Harlin



こうしたものは、とても大きな構造をしており、長さで、50から200フィート、幅が25フィートもあった。同じ母系の数家族が一つの建物に住むと言う現実の姿でうまく運用していた。男たちが楡の木で骨組み、正面の玄関を造り、そして、楡の木の皮で屋根を葺いていた。男は、彼の妻の家族と一緒に生活をしていた。うす暗い内部を明るくしていた料理する囲炉裏から出てくる煙は、屋根に付けられた交互に付けられた穴を通して外に排出されていた。しかしながら、雨の時、あるいは、冬の雪が降るときなどは、この煙を出すための穴は、一連になったカバーが部分的に閉められていた。そして、屋根は高かったけれども、煙により目はひりひりと痛く、疑いもなく、スープのやかんからの水蒸気、赤ん坊や熊の脂肪分、煤煙、たばこ、そして、人間性に付随するようなものが出すいろいろな臭いが混じり、かなり独特な雰囲気を作り出していた。とはいえ、最低限、それは、温かく、そして、乾燥していた。

ヒューロン族の社会

ヒューロン族は、八つの氏族にわかれていて、四つの部族の同盟ができていた



ヒューロン族は、きわめて巧みに、曲がった屋根と横壁の非常な背の高い骨格でできた共同長屋に住んでいた。

北東地域の交易網

複雑な取引ルートの体系が北東地域の部族を結び付け、そして、広範な領域の商品を交易を可能にした。

ニピシング族Nipissingsやオタワ族Ottawaとともにヒューロン族は、南の農民からの農産物、北の漁業をし、そして、狩猟をしている人たちの自然の恵みもの、そして、もっと遠くの部族がもたらす、海の貝殻(貝殻玉)のようなものやバイソンの毛皮などを取引する、その全体の交易網のなかで、取引の仲介人の役割を演じていた。

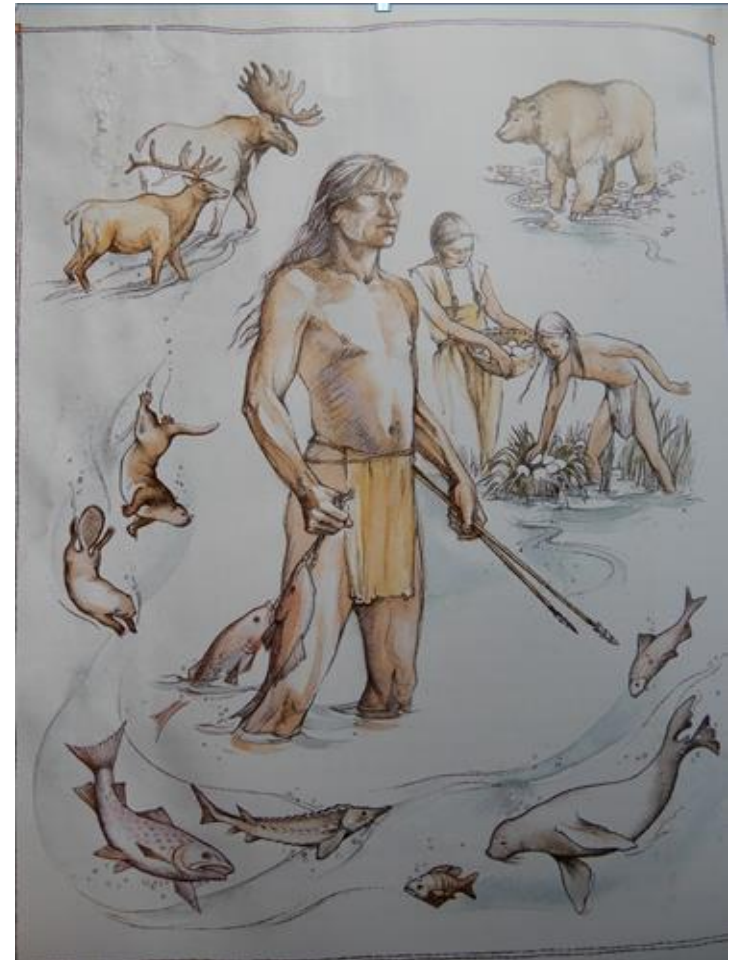
イロクオイ族

イロクオイ集団の起源は、恐らく、イロクオイ族により同盟のしるしとして説明されている日食のあった1450年頃ではないかと考えられる。

5つの部族の集団とも呼ばれ、モーホーク族、オナイダ族、オホンドーガ族、カユーガ族、そして、セネカ族からなっていた。1700年代に、これに、タスカローラ族が加わり、6つの部族集団となった。

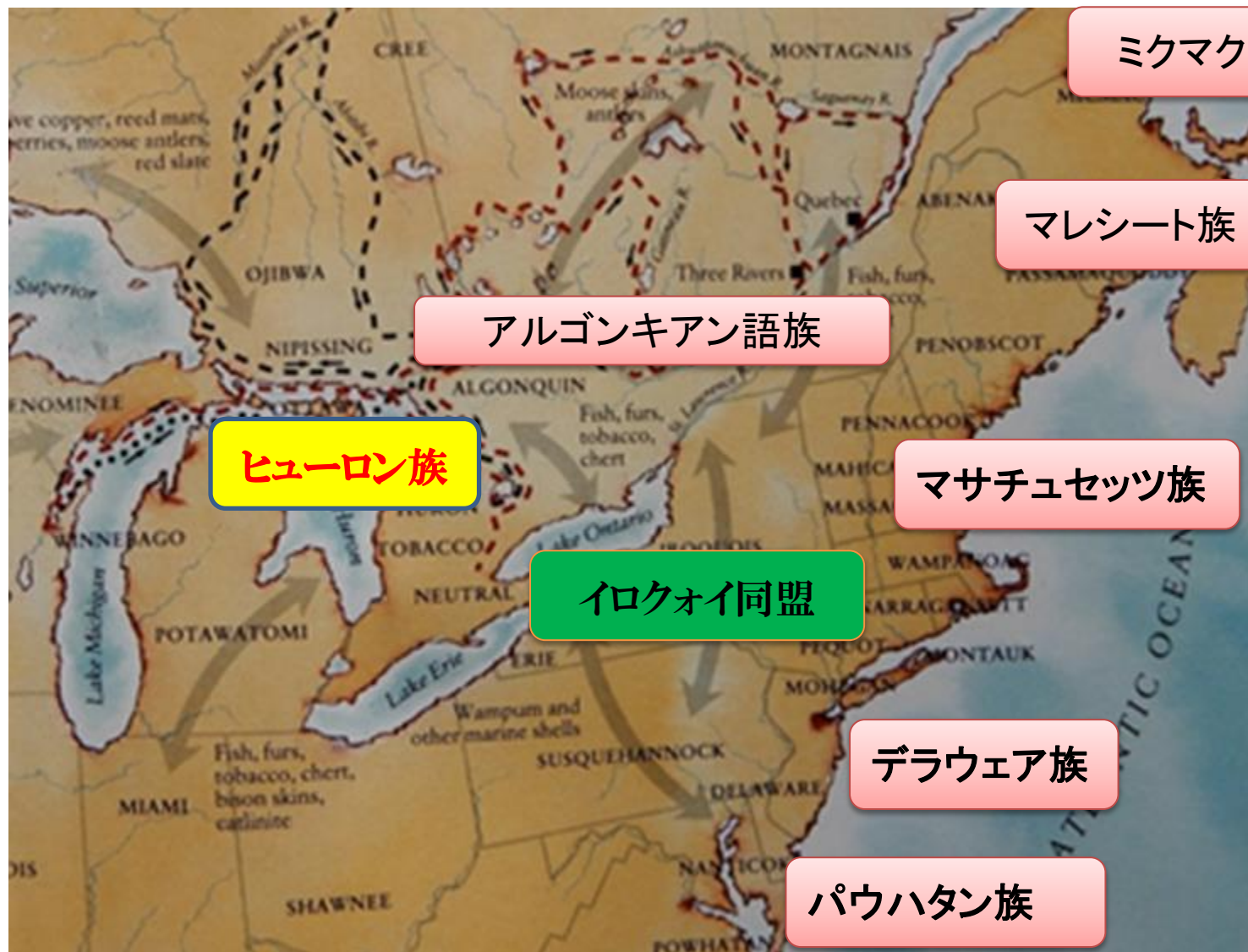
彼ら自身の街の独特な特質を保つ手段を見出した。彼らは、もともと、自分たちの中身のなくなった身分というものを、養子にされた捕虜（とりわけヒューロン族）で満たすことによりこうしたことを達成していたが、しかしながら、同盟として可能なことはなんでもする、そして、究極的には、結果的にヨーロッパの覇者となったものと同盟を結ぶことにより、これを達成していた。

こうしたことにより、彼らは、周囲の部族が海外からの侵略者たちにより散り散りにされていたのに対し、ますます強力になって行ったイロクオイ族は北東地域では、最も恐ろしい、そして、尊敬された原住民に仲間入りをしていた。



アルゴンキアン族の社会

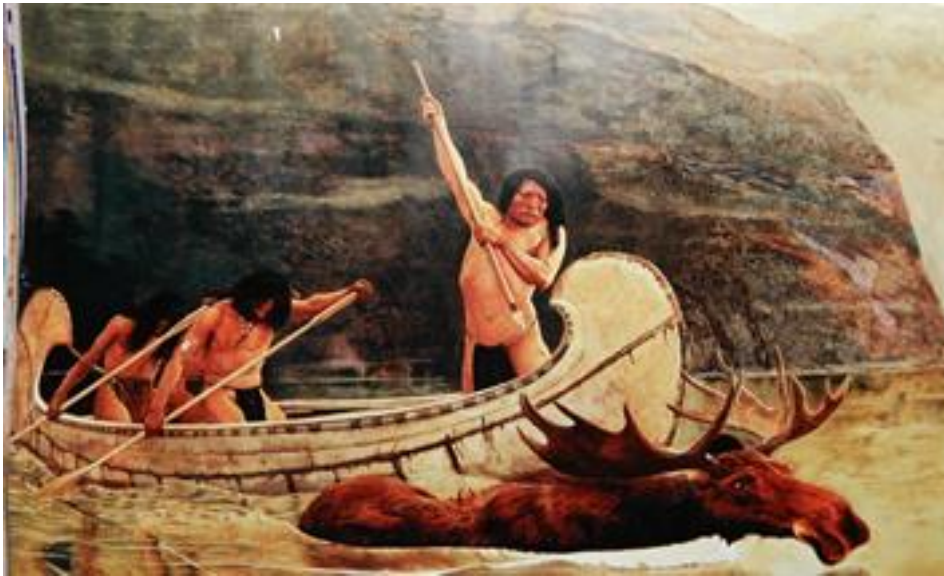
北米地域のその他の全ての部族は、本質的にアルゴンキンの言語を話していた。



フランス人と毛皮の取引

フランスはセントローレンス川に入り、この大きな川の流域に沿った土手に彼らの最初の植民地を設置した。この戦略的な立場を通して、彼らは、五大湖、ミシシッピー川、そして、究極的には、大陸全体にわたる内陸にまで網羅する経路を手中に納めた。

ほんの僅かの者が、インディアンたちを対等な人と見なし、貿易をするためにやってきて、そして、そこに住む原住民たちの生活の中に入って行った。



ヘラジカの追跡 George de Forest Brush, 1888



Micmacは、ヨーロッパ人と遭遇した最初の原住民たちの内の一人だった。彼らの来ている衣服は、1865年頃にNova Scotiaで撮られたこの写真のように、Micmacの母親と子供の時の肖像画に説明されているようなものを身に付けており、これは、フランスと300年以上も接触していたことを示している。

フランス人と毛皮の取引

1610年までに、ヒューロン族のカヌーに乗った小艦隊が、毎年の春には、毛皮を裁き、交易をするため(彼らは、実に長い回り道の旅をしてこななければならなかったし、もっと直接的なルートは、敵対するイロクォイ族により固められていた。)にケベックにやって来ていた。かつて、交易が確立されると、ヒューロン族はアルコール―これは、その後、交易の主要な取引対象品になって行っただが、その味を覚え始めた。フランス系のカナダ人が、即座にインディアン達に、公然と人前で約束し、そして、溢れるばかりのどんちゃん騒ぎを教えた。教会と州がアルコールの販売を認めなかったし、それを交易する中で扱う事を許さなかったが、しかしながら、原住民たちは既に、続いて来る世紀を特徴づけるような付加的なものと、破壊を既に経験しつつあった。

The Metis 混血児

フランスが、彼らの植民地を設置している時に、とりわけ、St. Lawrenceの近くでは、彼らは、原住民たちの社会と協力して、毛皮の取引を確立しようと考えていた。スペインの貴族たちは彼ら自身の領地を確保しようとしたのに対し、フランス人は、極わずかの彼らの植民地からは少し離れて、できるだけ現地住民の生活様式に見習って、新しい土地でうまく生き残るようにと生活していた。その結果として、フランス人の植民者たちは、ほかのヨーロッパ人達よりもずっと現地住民に対して、人間的な見方を発展させていた。彼は、原住民の話す言葉を勉強し、そして、カヌーを操り、食糧にしても、衣類についても、また、さまざまな風習でも、その地域の習慣に従っていた。時には、別々に、フランス人と現地住民との間の結婚で生まれた混血人も生活していた。スペイン領のアメリカで見られた混血人のように、インディアンとヨーロッパの世界との混血を試したかの様な混血人が居たのだ。

Samuel de Champlain

カナダにおける大成功をおさめたフランスの大仕事の後に続いた立案的な指導者はSamuel de Champlainだった。

Champlainは、1603年に地図の作成者、そして、探検者としてニューフランスにやって来た。
1604から1607年大西洋海岸を探検し、地図を作成した。

Champlainがフランスの少年たちを、その地域の言語と習慣を学ぶために原住民の家族とともに暮らすように送り込み

1608年に、内陸地方に到達するように、St. LawrenceにQuebecを設立した。

1615年にChamplainは、ヒューロン地域に入る下検分の踏査をすることによりヒューロン族の持つ障害を取り払った。彼の訪問の間に、彼はオナイダ族の襲撃に加わりもした。襲撃そのものは、大失敗という結果になったけれども、フランス人の男がいたと言う事で、彼のヒューロン族の友人により大変な感謝を受けた。
そして、ヒューロン族との取引を独占的に取り扱う手立てを造ることに成功した。

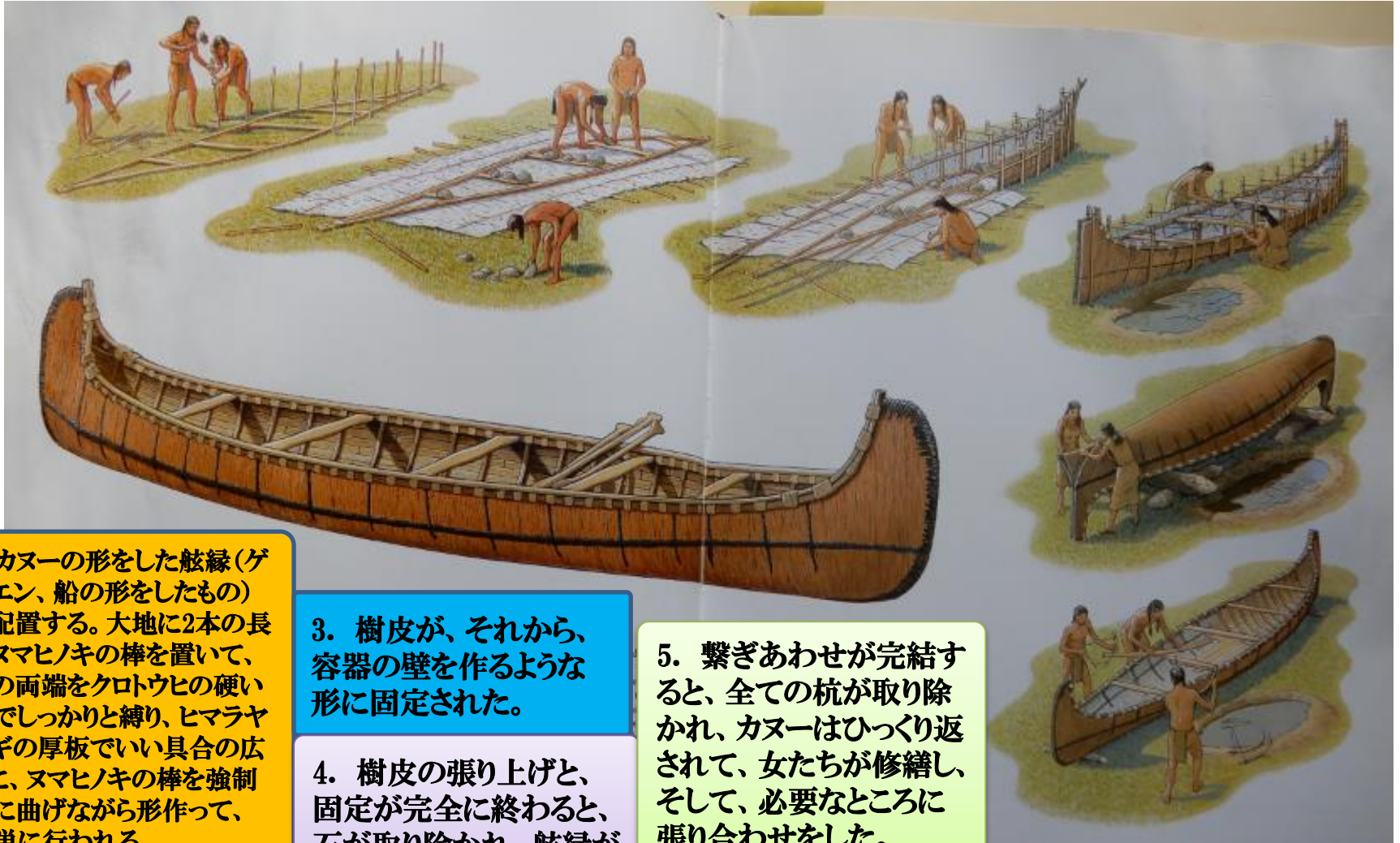
1609年 たった一発で2人のイロクオイ族の酋長を殺害

こうした殺人が、既にフランス人のヒューロン族との心温まる様な関係について、フランス人に対するイロクオイ族の煮え立つ敵愾心が増大して行き、そして、後にはイロクオイ同盟全体のオランダやその後のイギリスの植民地との継続的な同盟へと変わって行った。



アルゴンキン族の味方とフランスのマスカット銃の部隊が一緒になり、Sammuel de ChamplainがMohawk Iroquoisの連合軍を負かしている。そうすることをする中で、彼は、強力なイロクォイ同盟の生涯に渡る敵を作ってしまった。この銅版画はChamplain自身の探検の解説書であるLes Voyages Sieur de Champlainに最初に出てきた。

NATIVE AMERICAN TECHNOLOGY



1. カヌーの形をした舷縁(ゲンエン、船の形をしたもの)を配置する。大地に2本の長いヌマヒノキの棒を置いて、その両端をクロウヒの硬い根でしっかりと縛り、ヒマラヤスギの厚板でいい具合の広さに、ヌマヒノキの棒を強制的に曲げながら形作って、簡単に行われる。

2. 杭が引き抜かれて、船の形状を沿って作られた両側の縁の穴に沿っておかれる。

3. 樹皮が、それから、容器の壁を作るような形に固定された。

4. 樹皮の張り上げと、固定が完全に終わると、石が取り除かれ、舷縁が適当な高さに持ち上げられた。

5. 繋ぎあわせが完結すると、全ての杭が取り除かれ、カヌーはひっくり返されて、女たちが修繕し、そして、必要なところに張り合わせをした。

6. 最後に男たちが、シラカンバの長い棒で長さ方向に置いて、内部を強化した。

イエズス会の使節団

イエズス会は、Cardinal Richelieuの後、1612年にニューフランス(ちょっとしたイギリスの植民のあとに)の植民地の再組織編成の一部として、ここに上陸し始めた

カナダは、着実に成長する季節に恵まれる様な地域に住んでいるヒューロン族のような農民と、モンタニエ族のように、一年を通して、先祖代々のキャンプ地を渡り歩いて移動している活発な狩人により絞められていた。イエズス会は、原住民の居住者に対応する異なった二つのやり方を進めていた。



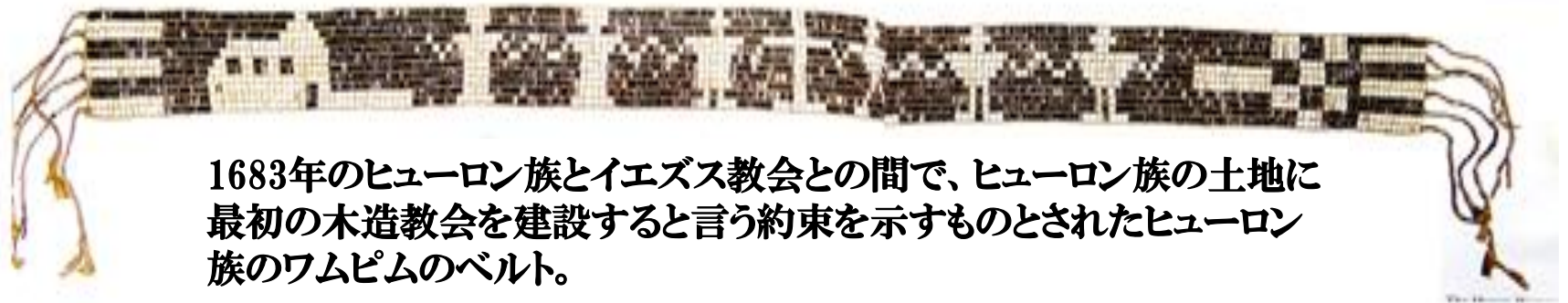
使節団 Frederic Remington, 1892.



19世紀の埋葬を示す者が、インディアン達の間で、説教をしているイエズス教会の伝道師を表している。

1630年代になり、ヒューロン族の部落に、伝染病が襲撃してきたあと、こうした謙遜的なイエズス会の、ヒューロン族の周りへの侵入が、気まづくなり始めた。こうした恐怖の時期に、年寄りたちは何も助けることが出来なかったが、でも、フランス人は、(仮に彼らが病気になったにしても、)自分たちの人々が塊になって死んでいるのに、彼らはただ単なる病気になるだけで済ましていたということに気付いた。彼らは自問した、なぜ、彼らは大丈夫なのか？ あるいは、彼らが奨めている洗礼かも知れない？ それは、我々の人々を殺す悪魔の儀式なのか？ それとも、改宗者を防護する癒しの儀式なのか？ ヒューロン族はこうした事柄について分類した。しかしながら、まさしく疑問が彼らを、イエズス会に対して、ますます厳しく、そして、冷たい見方を取らせた。

彼らの人口は、病気や彼らの生活様式に見られた極端な変化により急激に減少し、彼らは、1694年には、残ったヒューロン族を散り散りばらばらにしてしまったイロクオイ族による、膨大な攻撃に抵抗することが出来なかった。この攻撃のたくさんの生き残りの人達は、冬の飢餓のために死んでしまった。多くのものがケベックやスペリオル湖周辺に難民として逃避して行った。



1683年のヒューロン族とイエズス教会との間で、ヒューロン族の土地に最初の木造教会を建設すると言う約束を示すものとされたヒューロン族のワムピムのベルト。

インディアンの持続性のねばり

ヨーロッパ人の侵入を取り扱う戦略を発展させてきたしっかりとした基準

三つの方向性

最初のは、外部のものと妥協することを受け入れ、中途まで進むこと

二番目は、基本的なインディアンの魂を維持しながら、外部のもののやり方の多くを取り入れること

三つ目は、全面的に、そして、時々には激しく、外部のものに対してこれを拒絶して、対抗して行くやり方

Membertou

改宗は、彼自身の原住民としての深く心に抱いた信仰と、フランスとの交易と彼の受け入れたキリスト教の宗教的な要求との間での葛藤を生み出した

Kateri Tekawitha

不当な圧力を加えるモーホーク族の血族から苦痛を軽減するようにし、そして、彼女にとっては、彼女が若いときに失った家族のための気に入った置き換え場所となった安息所をキリスト教の教会に提供した。

Aharihon

どんな外部に対しても、残虐を打ち負かす防御をして恐怖に対抗

Henri Membertou

カナダにおける最初のカソリック教の改宗者

もっとも素早くフランスとの取引に道を開いたミクマク族の指導者として、彼は彼自身を政治的な発展をさせる手段を持った

イエズス会はMembertouが、祈祷師として行動をし続けていることに、そして、なおも、数人に妻を持っていること(指導的な役割を担っている彼の立場にはこれが必要だった;数人の妻が居るという事は、寛大な振る舞いをすることを心掛ける指導者の家事の面倒をみるために、準備をしなければならない大量の食事を用意する責任を果たすために、そして、養育しなければならないたくさんの子供たちのためには、どうしても必要なことだった。)に、まったくけしからぬと思っていた。

彼の家族とフランスとの合意が継続



1910年のMicmacの旗は、イエズス会の僧侶のJesse Fl é cheと大酋長のMembertou

合意は続いたばかりでなく、それは、イギリスの占領地とイギリス国教会の敵愾心に効力を及ぼしたカトリック教会の教義に対して神聖だと宣言するほどの実を結んだ。事実、今日、現代のミクマク族の地域とバチカンとの間の特別な外交的関係さえ存在している。

Kateri Tekawitha

1656年に、キリスト教徒のアルゴンキアン族の捕虜と、彼女のモーホーク族の夫のとの間に生まれ、後にKateri Tekawithaとなった若い少女

平和な暮らしを願い、モーホーク族は、使節団に頼ることが賢明であると考えた。1667年にイエズス会が到達すると、若い孤児となった少女が彼らに対して食事の世話をし、そして、彼女は彼らの説教と教えを熱心に聴くようになった。

1679年に、彼女は、永遠の純潔の個人的な誓約をした。

今日の原住民アメリカ人のカトリック教会のなかの非常に大きな、活発な宗教の動きであるが、これが彼女にちなんで名づけられた

奇跡

仮に、インディアンの信仰とキリスト教がであうような共通の場があるとしたら、それは、奇跡の場所のなかだった。キリスト教は、(いつでも)心底、奇跡の可能性の中に、神から特別な必要に対する答えに対し下れる特別な祝福、あるいは、祝福があるものと信じていた。インディアンもまた、裁可あるいは好意—干ばつした時の雨、特別な病気や傷害に対する治療、非常に厳しい条件のなかでの特別な食料の恵みと言ったような、神の天与がある、彼らの神のようなものを当てにしていた。



Kateri Tekawithaの最も古い想像画

Aharihon

オランダガの酋長のAharihonは、捕虜の拷問について有名であった

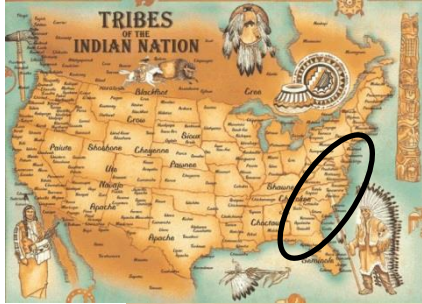
1663年までに、Aharihonは、個人的に60人ものたくさんの敵を殺し、そして、拷問により死のめに合わすためにさらに80人もの男たちを捕えた。彼は、悪魔の様な男だったのか？ 彼の時代の背景からすれば、有意義なことだといえるものでもない。そのとおり、彼は外部のものを憎んでいたのだ。彼はたくさんの人の報復的な死を命じていたのだ。しかも、彼は単純なものよりもっと過酷な死刑執行人であった。



セネカ族の棍棒の握り。球は手で彫刻されている—
これは、勇気と機敏さの象徴

Aharihonは、確かに極端ではあったが、彼は特別の時期に生きていたのだ。彼の文化の風習や信仰のなかでは、彼は、そうしたものは、原住民のために彼らの指導者に対して許された個人的な裁量の範囲内のものであり、彼の統治する者としての力量はいつも尊敬されていた。

イギリスと大西洋沿岸地域



New York 湾での、Hendrick Hudson の到着

1588年のArmadaの勝利で、イギリスは、スペインをヨーロッパのみならず、海外に置いても防戦側に追いやった。この勝利がイギリスに、北アメリカに独自の植民地の開拓を始める道を切り開いた。南の地域ではスペイン領フロリダ、北の地域ではニューフランスの大集団とともに、イギリスは中央の大西洋岸地域に彼らの最初の植民地への入植者達を送り込んだ。

バージニア

1607年に、後にJohn Smithという幸運の名前のついた、良く旅をしていた軍人が、Jamestownという植民地を開拓した。

Jamestown王立植民地の設立（1607）の直前に、Powhatan酋長のもとに、人々が、海岸地域のバージニアの原住民と一緒に合わせて、Powhatanと彼の家族により率いられた、一つの酋長の統率する集団にした。

Jamestownを取り巻いている沼地は、夏には、水たまりや、淀んだ水の溜まった池、急速に蔓延して行く病気、とりわけ入植地の次々にたまって行くごみの山で溢れたしまった。

Jamestownのイギリス人は、彼らの入植地が商業的な賭け以外の何ものでもないとは決して口実にはしなかった。地方の人達を改宗させようとイギリスの首相が署名した教会は一つもなかった。このことは、現地の原住民の人達には非常にうまく適合していた。



Pocahontas

もっとも有名な改宗は、Pocahontas、彼女はPowhatanのお気に入りの娘、だった。

原住民の指導者と極短い結婚生活のあと、Pocahontasは、Joh Rolfe、の妻となった。その結婚は、少なくともしばらくの間はその関係を安心させるイギリスとPowhatan族との間の協定を強固なものにする素晴らしい外交上の成功だった。



Hudson川の発見 Alfred Bierstadt, 1874

Powhatans族の見方からすると、彼らは、こうした新しい人たちが自分達の土地に入ってくることを歓迎しなかったばかりか、彼らは、自分達ができるときにだけ、食糧やその他の必要なものを差し出して助けるだけだった。

New England



オランダの入植地ができるまえのManhattan島の19世紀の状況を表したもので、ここでは、北東地域の構造的に長屋構造が特徴である様な様式化した家の描写がなされている。

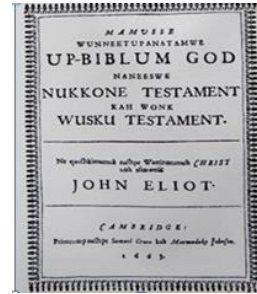
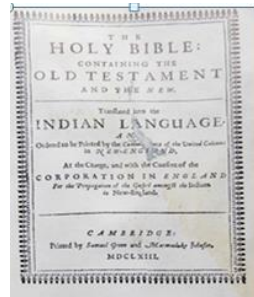
“巨大な浮かんだ島がこの陸に向かって来る。”と彼は叫んだ。

彼らは、それを不思議な島として何の疑いもなく見ていた。彼らにはこの摩訶不思議なものに相当する様なイメージのものが何も浮かび上がらなかったからだ。しばらくして、彼らは、その生き物が、非常に毛深いという特徴を持っはいるが、ある種の人であるという事に気づくようになった。しかしまた、原住民たちは、この生き物を決定的に非人間であると思わせるようなある特質—食べるものや飲んでいるものの選択というようなもの—を見た。多くのものが、例えば、この不思議なものたちが消費する食料は、かれらが、死の世界から戻って来た幽霊だと言うことを証明していたが、こうしたことが得心されるものであった。赤いぶどう酒を飲むという事は、血を飲むようなものだった；ビスケットを食べるのは、乾燥した肉を食べている様なものだった；糖蜜は濾すことが必要だった；お米は明らかに蛆虫（うじむし）以外の何ものでもなかった。

巡礼

ピューリタンの見方では、原住民の人口の大幅な減少は神の贈りものであった—彼の手が、彼自身が選んだ人達だけが、植民地に居住することを許すように原住民たちを殺したのだ。こうした宗教的な偏見に目をつぶり、ピューリタンたちは、彼らの周りに住んでいる人たちの人間性を認めようとしなかった。

英語で書かれた、John Eliotの聖書の表題のページ（左）とMassachusetts族の言語に訳されたもの。

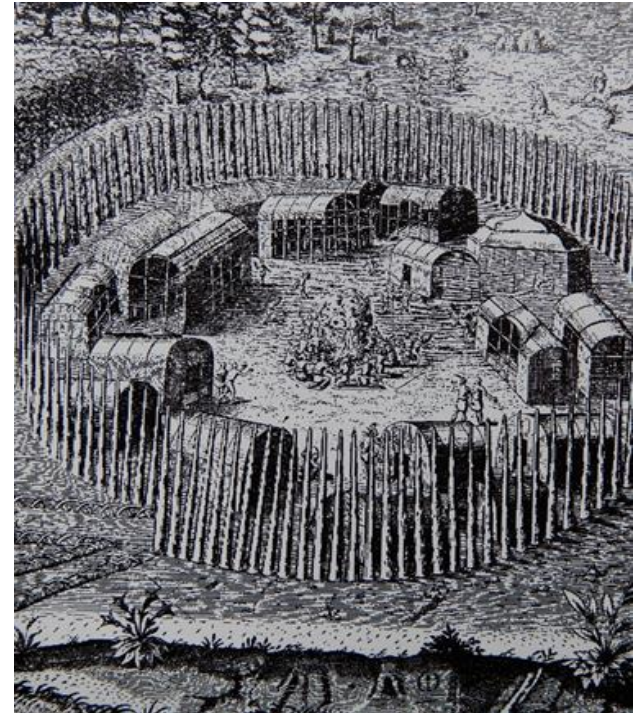


Pequots族を説教しているJohn Eliot. インディアン達は、ヨーロッパ人の触感と結び付けて毎日の衣装を着ていたようにみえるけれども、もともとのおかしな衣裳を身に付け描かれている。こうした“歴史的”なイメージの多くと一緒にいる様に、正確性がもともとの目的ではなかった。

Eliotが伝道を始める前まで、生命は、多くのインディアン達にとって希望の持てないもののように見られてきたので、彼のキリスト教的な親切は望みを失うことに対する意味のある治療の様に思われ始めた。1650年になり、Natickに改宗した者たちを入植させた。Bostonから南西に17マイルほど離れた6000エーカーの土地に設立され、入植者たちは、“赤い（インディアンの）ピューリタン”の社会—Praying Town のモデルとなることを目的とされた。

その他の植民地

イギリスがマサチューセッツやバージニアにかなり大きな植民地的生産地を構築していた間、スウェーデン人達は、Delaware 川沿いに、やや小さな飛び領地を造り、そして、オランダの植民者は、DelawareとHudsonの双方に沿って入植をしていた。1621年に設立されたオランダの西インド会社は、二つの川の河口近くに植民地を計画し、そして、Mohawk川とHudson川の合流地域の近くに、Fort Orange 後のAlbany)という新しい植民地を築いた。



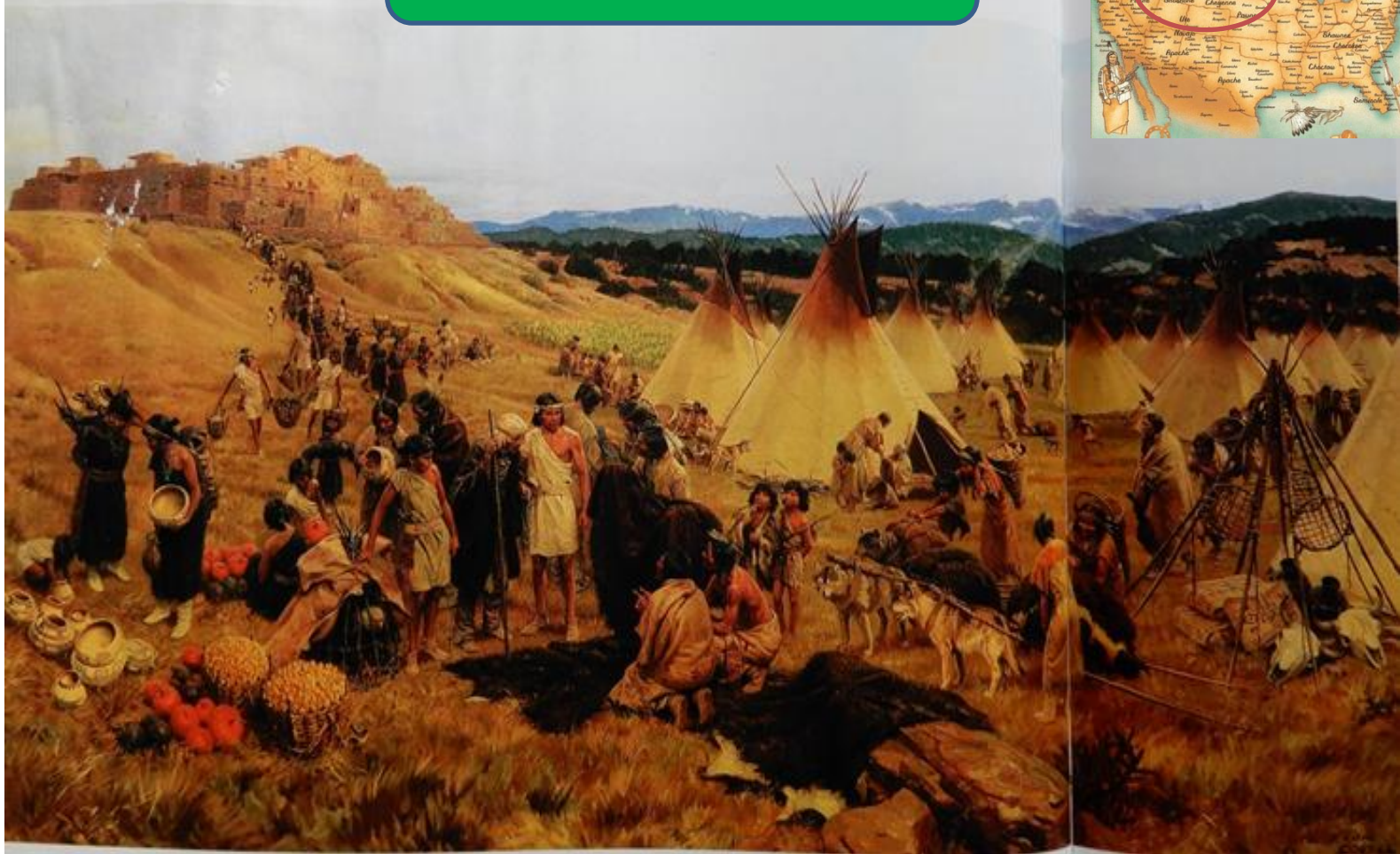
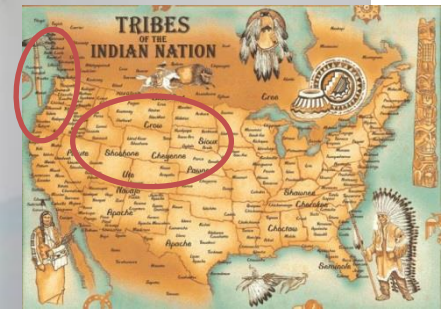
Theodore De Bryによるバージニアの海岸線地域の防護柵で囲まれた集落の彫刻。“Town of Pomeiok”と名付けられた集落



1626年のManhattan島のPeter Minuitへの売却

スウェーデンの植民地は、1655年にオランダの占領下となったが、そのオランダが1664年には、今度は、イギリスに敗れ、スウェーデンと原住民たちが共有していた文化的な形跡の多くが、綾なすアメリカの歴史の中に取り込まれていった。

大平原と北西地域



1500年頃のPecos Pueblo Tom Lo vell 1973、

ヨーロッパ人が、最初に訪れて以来一世紀以上の間、背の高い草の大平原に物理的に到達したことはなかったが、そこでは極めて大きな変化が、1400年代の後半から、1500年代を通して起きていた。



この図が初期の時代の馬との遭遇の証拠となる絵

突然、彷徨っている動物たちが大平原に出現した。彼らは、大きく、強力で、そして、素早く移動し、かつ、彼らは、人間をその背中に辛抱強く乗せて運ぶことが出来た。その動物は馬と呼ばれた。神聖なる円と馬が、一世代の間に大平原での生活を一変させたのだらう。

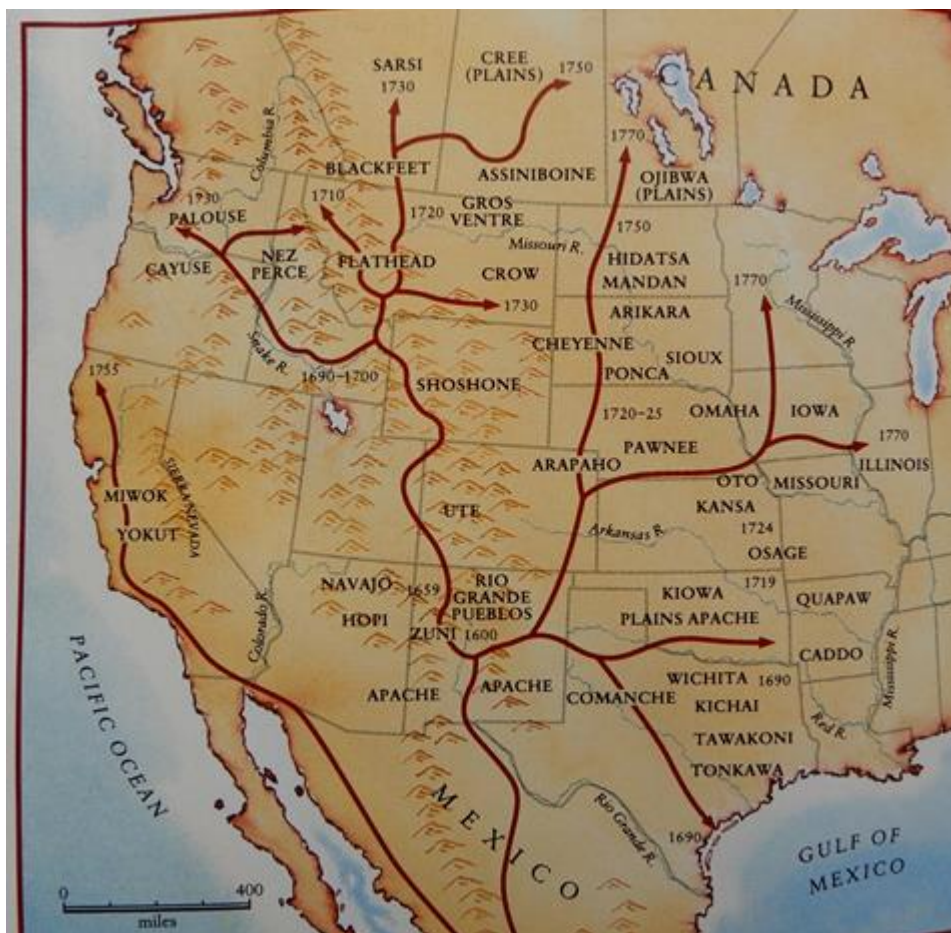
馬の普及が、土づくりの家の拡販と同じようなルートで広がって行った



Canyon de Chelly National Monument アリゾナ



馬が来る前 Dan Taulbee (Comanche), 1960.



ラコタ族の間では、馬が余りにも素晴らしかったので、馬は、“神聖なる犬”として取り扱われた

ポウニー族や、カドー語族は、後には馬にとって代わられた、沢山の機能を持った犬の大繁殖をしていた。

テント、ティピーと呼ばれるが、は、もっと背が高く、大きなものにする事が出来ると知った。

馬の回帰。

北西地域

1750年頃に、スペイン人、イギリス人、そして、ロシア人が、北西の海岸地帯に到達し、そして、最終的にはイギリスが覇権を握ることになったが、かれらがこの地を如何に制圧するかで競合していた。



北西海岸地帯のインディアングループが、結婚式のお祝い儀式の中で、太鼓と儀式を織り交ぜて演じている。

北西海岸に苦心して築き上げられた酋長、彼らの複雑な社会は、鮭、植物の根、そして、ベリーと言ったような豊富な自然の恵みに頼り生活していたが、彼らはヨーロッパ人との海洋生物の毛皮の取引により、強烈な刺激を受けていた時には、彼らは、また、ペストの病気（あるHaida族の街では、彼らの人口の90%もの人が失われた）により、荒廃が進んでいた。



北西地域の海岸の恵まれたもの

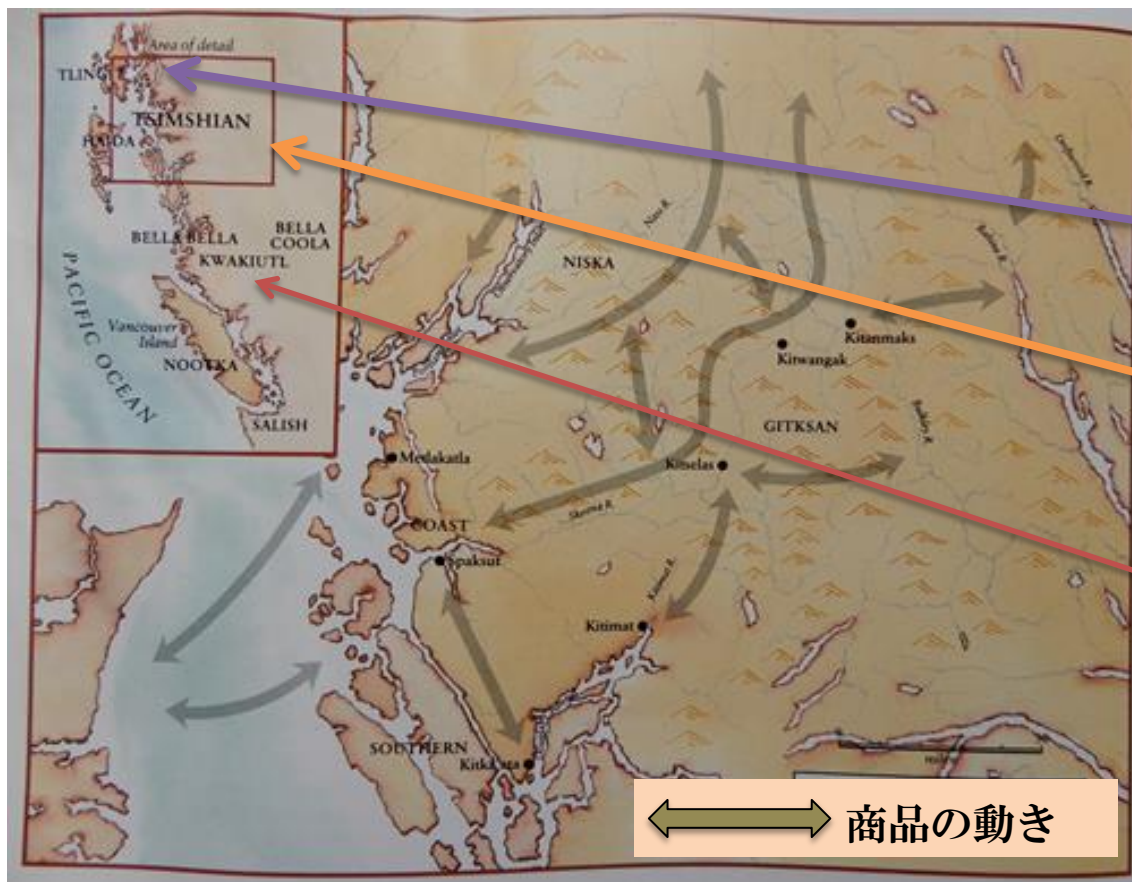
Richard Schlecht

海岸地帯に住んでいる人達は、速い流れの川、大洋、そして、恵み深い気候からもたらされる利益を満喫していた。彼らは、狭く、水の豊かな溪谷地帯の内陸まで、拡大すると同様、交易で複雑な文化に富んだものを創造しながら、そして、高度に発達した総称芸術の形を造りながら、海岸線に沿って、多くの人々の社会を、作り上げていた。



カヤックは、皮革で覆われた態様をゆくボートで、個人の狩人に相応しい者だった。カヤックの建造は、アラスカのAleuts族やInuit族の間で非常に発達していた。

黒曜石であるとか、琥珀、シロヤマブキ、そして、貝殻と言った様なエキゾチックな品物、こうしたものは、そうした家系の排他的な恩恵であったが、これらの取引を管理することにより、チムシアン族の国のなかで秀でた家系の発達が見られた。こうした世襲的な指導者たちは、彼らが、彼ら自身の所有している司祭職、その他の有力な家系、そして、幅広い交易網と幾重にも関係していたので、通常の人々の上の立場にのし上がって行った。



襲撃と戦闘行為は相変わらず継続して起こった。北の方に隣接する**トリンギット族**が、アジアの軍事的な技術や戦術を伝達する経路におったので、彼らは、こうしたものを**チムシアン族**に対して利用し、そして、チムシアン族は、今度は、これを西の地方のQueen Charlotte群島に居るハイダ族や、南の地方に居る**クワキウトル族**に対して使っていた。奴隷を手中にするのは、こうした襲撃の確かな動機の一つとなっている

18世紀の終わり近くにおけるチムシアン族の交易ルート

広範囲に及ぶ商品がNass 川やSkeena川、そして、繋がっている水路を上下していた。北東の内陸から、羊の角、ヤギの毛、乾燥ベリー、黒曜石、毛皮、銅、ろうそく魚の油脂、翡翠の手斧の刃、グリズリー熊の爪、そして、無数のその他の商品がやって来た。太平洋の海岸地域からは、大洋の貝殻、オットセイの歯や皮、乾燥した魚、シャチの顎、ハイダ族のカヌー、難破船の鉄、彫り物や彫り物用の道具などが持ち込まれた。



北西海岸、並び、北極地方に原住民に使われていた、彫刻された骨の罾杖、これは、罾で動物を捕まえる機能を持ったものの一部；鮭を捕獲するためのトローリング用の鉤針；意図した餌食を上手く槍でつくことを象徴しているような、銛の刃を保管したクジラの恰好をした入れ物；そして、角でできたスプーンなど、の道具の集まり。

アラスカのNomeからのエスキモーがセイウチの牙に彫刻するため回転ドリルを使う（1912）
ドリルを使うために、彫刻師はドリルの軸の一端を彼のマウスピースの中の受け入れ口にピンと嵌め、もういったんのドリルの刃を彼が彫ろうとしているものに当てる。彫刻する者は、弓を前後に素早く動かすと、紐が軸の周りに巻き付き、両方の方角にドリルを回転させる。



ビュクダンの燃焼

Woodrow W. Crumbo
(Potawatomi), 1946

ビュクダンの燃焼は、ペヨーテの儀式の一つの局面である。ニオイウルシの香りが、そこに参加した者の気持ちと心を綺麗にする。この絵の中の役を務めるものは、太鼓をたたく者、ガラガラをもって合図をする人、そして、火にビュクダンをくべる三人目の男である。

インディアン達の見方からすると、生きることには変化が富んでいた。儀式と重要性は、冗談と喜びにより調和がとれていることが必要だった。このようにして、初期のスペインの侵略者たちが、軍事的な力としてやって来たが、指揮権と好戦的な態度の繋がりを認識する準備では、原住民たちは、そうした定常的な用意はばかっていると考えていた。もっとたくさんの遣り甲斐のあることがあるのに、なぜ、あなたの生活はそんな融通の利かない屈辱に時間を割くのですか？必要とされた時に侵略者に対抗して戦闘する軍に参加することはよいことであり、素晴らしいとは思ったが、しかし、食事を与えたり、旅をする道もあるし、また、見る事の出来る風景もあったのだ。

他のヨーロッパ人が到着した時に、彼らは、ことごとく彼ら自身の独特な、均一性の品格を原住民の人達に課そうと試みた—かつてヨーロッパ系アメリカ人の入植地により強力にされていた、侵略者たちの軍隊の力を、そして、先生や、宣教師、そして、政府の管理人により明確に詳述された白人たちの優位性の教義を利用してである。

にも拘わらず、広大な原住民の圧力にも拘わらず、彼らの文化的な遺産への信じられないような侵害にも拘わらず、接触を始めた当初の2世紀の間、原住民の人達は彼ら自身の、そして、その他の多様性のなかに強さを見出そうとし続け、そして、彼らの世界の中で起きた巨大な変化で呼ぶようにしようとしていた。

JAY MILLER

Thank You!